

# MADE IN SINGAPORE. (メイド・イン・シンガポール) おすすめ新素材 アジア最大級のバードパーク、バードパラダイス



シンガポール観光局 (STB) は現在「Made in Singapore. (メイド・イン・シンガポール)」のキャンペーンを展開している。そのテーマの中でぜひ商品に組み込みたい新しい素材が、2023年5月にリニューアルオープンしたバードパラダイスだ。街の中での意外な側面を探索するというMISのテーマ通り、世界から集まったさまざまな鳥との出会いがあるだけでなく、マンダイ・ワイルドライフ・リザーブ (MWR) の自然に対する取り組みにも驚くべき発見がある。

## 鳥を通じて世界の生態系を見るバードパラダイス

2023年5月にマンダイ・ワイルドライフ・リザーブ (MWR) に新たに登場したのがバードパラダイス。同社が進める再生開発計画の一環で、元々西部にあったジュロンバードパークを2023年1月に閉園し、鳥をマンダイオーキッドガーデン跡地へ移し、リニューアルオープンした。シンガポール動物園など他のパークと同じエリアに移転することで4つのパークへの訪問拡大が見込まれる。

### 17ヘクタールの敷地に 世界の鳥が放し飼い

バードパラダイスは、17ヘクタールの敷地に400種3500羽以上の鳥類が生息するアジア最大級のバードパーク。アフリカの密林、東南アジアの水田、南米の湿地帯、オーストラリアのユーカリ林など世界の地理や植生を反映した飼鳥園のほか、さえずりをする鳥、サイチョウなどの希少種の保護エリアなど種やテーマで分けた10のゾーンに分かれる。飼鳥園は生息に近い環境に再現された中を歩きながらみられるウォークスルー型の展示になっているのでその地域にいるような気分が味わえる。餌やり体験ができた、ショー的なプレゼンテーションもあり、エンターテインメントとして楽しめるだけでなく、環境保全やサステナビリティへの取り組みも随所に見られ、さまざまな学びの要素があるのも特徴だ。

園内は徒歩で移動するが、入り口近くのペンギンコープ前からシアターのある中心部のセントラルプラザの間はシャトルが往復する。バードパラダイスの玄関口近くには、公共スペースのマンダイ・ワイルドライフ・ウエストがあり、無料で開放されている。高さ10mの滝が写真映えスポットになっているほか、アスレチック施設も備わり、ボタニカルジェラートなどサステナビリティを意識した飲食店やショップが軒を連ねる。



ネットで覆われているとは思えない開放感 (ウィングス・オブ・アジア) © Mandai Wildlife Group



公共スペースにある滝

### オーシャンネットワークエクスプレス ペンギンコープ

亜南極の海と陸地が再現された巨大な水槽にキングペンギン、ジェンツーペンギン、イワトビペンギン、フンボルトペンギンが生息している。水温と気温が10度以下に保たれ、照明も季節で変わる日の長さに合わせて調整し、夜にはオーロラが映し出され、魚の狩りができるように給餌器を備えるなど自然に近い生息環境を再現。よちよち歩いたり、水に飛び込んで泳いだり、陸地に飛び上がったり、ペンギンが本能のままに行動する姿が見られる。1階にビュッフェレストラン、2階のカフェでは軽食とペンギンをモチーフにしたスイーツ類が並び、ショップにはペンギングッズが多数揃う。



泳ぐペンギンと陸にいるペンギンが同時に見られる

### ホンリョン・ファウンダーション クリムゾン湿地帯

中南米にある沿岸部の湿地帯を再現したエリアで、ショウジョウトキやベニヘラサギ、アメリカンフラミンゴなどの赤い色の鳥をはじめ、カラフルなインコやオウムが生息する。広い空間で、鳥たちが自由に羽ばたけ、訪問者にとっても視界が遮られずに見学できる。この湿地帯を一望しながら食事ができるのがクリムゾン・レストランで、落ち着いた環境でランチとハイティーが楽しめる。



レストランからみた湿地帯エリア



バードパラダイス全体図 © Mandai Wildlife Group

### スカイ・アンフィシアター (円形劇場)

2000人を収容する円形劇場では2種類のプレゼンテーションが行われる。ワシやコンドル、ハゲタカなどの猛禽類が主役の「プレデターズ・オン・ウィングス」、インコやオウム、フラミンゴまで多様な色鮮やかな鳥たちが登場する「ウィングス・オブ・ザ・ワールド」をそれぞれ1日2回開催。ショーではなく、プレゼンテーションと呼ぶのは、見せ物としての演出ではなく、鳥の本能や習性、行動を見せているため。訓練の際も無理強いて覚えさせるのではなく、できたらご褒美をあげるなど自発的に学べるよう習慣付けているという。スクリーンに写真や説明が映し出されるため、内容が理解しやすい。



シアターは自由席



猛禽類の役割が解説される「プレデターズ・オン・ウィングス」

### 鳥と触れ合える餌やり体験と 人気プログラム

餌やりはバードパラダイスで人気のアクティビティで、複数のエリアで体験できる。ヨウムなどアフリカの鳥に餌をあげられるのがニュングエ森林ハート・オブ・アフリカ。鳥が餌が入ったカップに乗って、ミルワームの餌に食いつく様子を目の前で見学できる。そのほか、東南アジアの土地を再現したクオックグループ・ウィングス・オブ・アジアではペリカンに、ミステリア・ハート・オブ・アフリカにはハシビロコウもいる(餌やりは不可)。ロフトではインコたちの餌やり体験が可能。鳥たちが自分に近づいて、食べているところを至近距離で見ると大人から子供まで楽しい経験となる。



ハート・オブ・アフリカにはハシビロコウもいる(餌やりは不可) ロフトではインコたちの餌やり体験が可能。鳥たちが自分に近づいて、食べているところを至近距離で見ると大人から子供まで楽しい経験となる。

Made in Singapore. (メイド・イン・シンガポール) の体験となるユニークなプログラムもあり、ペンギンの水槽前に泊まるグランピング、鳥専門医療施設の舞台裏を訪れるプログラムがその例となる。



手に持つと意外と重いヨウムの餌やり

## エコリンクなどサステナブルな運営が随所に

MWRでは各所でサステナブルな運営を見ることができ、地域の野生動物への影響を最小限にすべく、バードパラダイスのオープンに先駆けて、動物専用の橋となるマンダイ・ワイルドライフ・ブリッジを建設した。これは1970年代に開通したマンダイ・レイク・ロードによって分断されていた自然保護区の野生動物が自由に行き来できるように設計された橋で、自生樹木を植え、今ではイノシシ、



動物が移動するためのエコリンク © Mandai Wildlife Group

ジャコウネコ、シカなどが横断するようになっている。マンダイ・ワイルドライフ・グループの営業・エクスペリエンス開発部シニア・マネージャーの野口さや香氏によると「野生動物にも影響を与えず、立ち寄ってもらえるようなパークにしたい」という願いが込められており、ジュロンバードパークからバードパラダイスへ引越す際も、鳥への負担を抑えながら進めてきたという。

バードパラダイス内も持続可能な設計で、滝や水撒きには雨水を使用し、照明はソーラーパネル発電、高効率の冷却システムを採用。パーク内の食事メニューも持続可能な方法で調達。プラントベースの肉を使ったインボッシュ・バーガーなど野生動物や環境に配慮した食材を用い、環境負荷が高い牛肉は使用せずに代替肉を使用している。



プラントベースの肉を使ったインボッシュ・バーガー

## 新パークとバンヤンツリーの リゾートがオープン予定

MWRはマンダイ地区の126ヘクタールにわたる土地を再生するプロジェクトを進めており、2025年を目処に段階的にオープンする予定だ。野生動物公園の支援施設が増えることとなるが、なかでも今後の大きな柱が新しいパークのレインフォレストワイルドとバンヤンツリーが運営するリゾート。レインフォレストワイルドは東南アジアの熱帯雨林をテーマに、ツリートップウォークなど森のアクティビティが楽しめる。バンヤンツリーが運営するリゾートは、4.6ヘクタールの敷地に24棟のツリーハウスを含む338室の施設。シンガポール建設局による超低エネルギー (SLE) 認証を目指したエコ設計で、ネイチャーウォークなどの体験プログラムも提供される予定。宿泊施設ができることで、複数のパークを一度の滞りで見られるようになり、マンダイ地区だけでなく、シンガポールの滞在時間が長くなるのが期待される。



周囲の環境と共存したツリーハウス予想図 © Mandai Wildlife Group

このほか、自然をテーマにした最新技術による室内アトラクションや緑溢れる公共スペースやシンガポール動物園の周りを囲むような遊歩道も設置予定で、さらにパワーアップしたネイチャー・デスティネーションへ生まれ変わろうとしている。「マンダイ・ワイルドライフ・グループが目指すのは、ゲートで仕切られたアトラクションでなく、人と野生動物をつなぐこと」(野口氏)。動物園のあり方、開発のあり方も見直さきっかけになる。